

退職記念講義記録

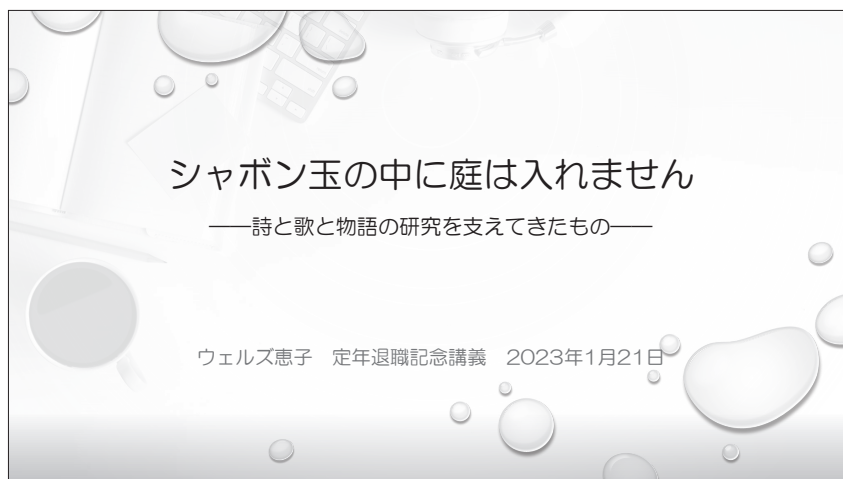
シャボン玉の中へ庭は入れません

——詩と歌と物語の研究を支えてきたもの——

ウェルズ 恵子

本日は寒い中をお集まりいただき、ありがとうございます。予想を超えて多くの方にお越しいただき、驚くとともに嬉しくて、どうしようかなっていうくらい感謝です。この機会を設けて準備してくださった専攻の先生方と卒業生の皆さんにも、心よりお礼申し上げます。

1

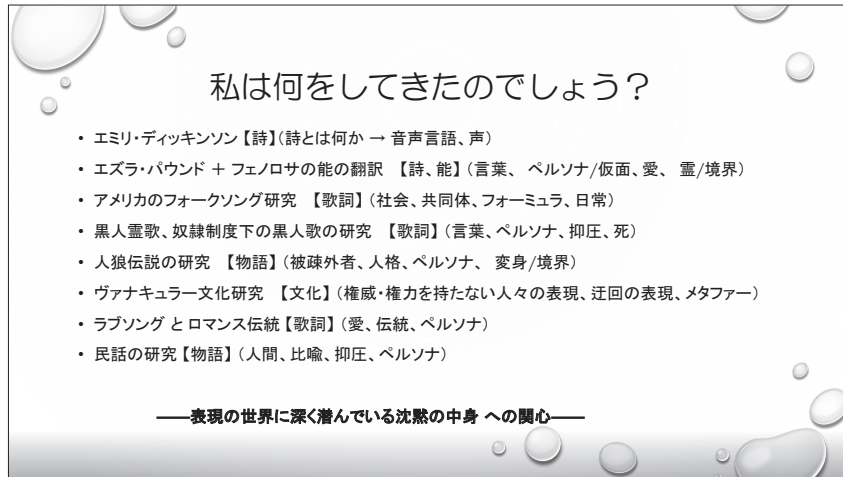


こうした記念講演では、本来ならば、研究の集大成となるお話をするものでしょうけれど、今日はむしろ、自分の原点を話題にすることにしました。というのも、これまでを振り返って何が集大成となるのだろうと考えたとき、子供の時の記憶がアルバムを繰るように蘇ってきて、出発点を見つめ直したくなったのです。そういえば、研究者として執筆するようになってからは、自分自身のことは書いた事がない。ならば記念講演では、私のことをよく知ってくださっている方々のお耳を借りて、自分を語ってみよう、そう思った次第です。私は何がしたくてこれまでやってきたのか、私がしてきたことに、ぜひやらなければという必然性はあったのか。つまり、私はどこから研究の方向へ船出して、何をどう求め続け、何を見つけたのか。この機会に探ってみます。どうぞ、お付き合いください。

さて、本日の講演タイトルは、「シャボン玉の中へ庭は入れません」。これは一体どういうこと？ その謎解きは、講演の最後にいたしますね。

2

では、まず、私はどんな研究をしてきたのでしょうか。画面に、これまでの研究課題と関心事を並べてみました。



私は卒業論文でエミリ・ディキンソンの詩の研究をしました。エミリ・ディキンソンの詩が好きだったんです。当時はまだアメリカ詩を専門にする先生が日本に少なく、私が在籍していた津田塾大学の図書館にはディキンソンの研究書や資料がありませんでした。卒論研究の途中で、私は一年間アメリカへ留学しました。英語の発音や聞き取りが少し楽になった頃、ディキンソンの詩を声を出して読んでみて、突然「わかった」と思いました。ディキンソンの詩がストーンと自分の身体に入ったような気持ちで、詩がわかったと思ったのです。曇りガラス越しに見ていた景色が急に目前に現れたような、清々しさでした。

これは、ディキンソンの詩の特性にも関係していると思いますが、私が理解したのは、詩は声に出して読むとわかるということでした。日本語の詩は、頭の中で自分の声を聞いて読んでいられるけれど、英語の詩は、大学時代の自分の語学力が不十分で、言葉の持つ音やリズムを声で再生できなかったために、もう一つわからないままだったのだと思います。この時から、音声言語と深い関係にある詩の言葉を意識するようになり、詩とは何かと考えるようになりました。

深い考えもなく進学した修士課程では、エズラ・パウンドの詩を研究しました。パウンドは様々な詩の実験をしているので、パウンドが「詩とは何か」を教えてくれるかもしれないと、ほんやり期待していました。ところが、パウンドの詩論を理解するには西洋文学の膨大な知識がないと無理で、修士論文はうまくいきませんでした。他方、パウンドからは「ペルソナ」という言葉と概念を学びました。ペルソナ(仮面)の概念は、その後ずっと私の研究の中心になりました。一旦大学院をやめた後に、もう一度パウンド研究をやり直そうと思って、神戸女学院におられた三宅晶子先生の教えを請うて、パウンドとフェノロサによる能の翻訳について研究し、論文を書きました。この研究では、世阿弥の能に魅せられてしまって、霊の世界と人間の世界の狭間に立ち現れるものも自分の関心の対象であると気づきました。

ここまでで、音声言語と詩、表の顔(ペルソナ)と隠された人格(影)、それらの間に落ちる沈黙、という関心事はほぼ出揃いました。ところが、現代詩の研究を続けるとして、このテーマを

どのような方法で突き詰めていったらいいかわからず、私はフォークソングの研究に移りました。フォークソングを研究課題に加えたのには、研究資金に関するきっかけもあったのですが、アメリカ合衆国の東西南北を研究資料集めで旅行するうち、歌は多数の人々を結びつけコミュニティを作る大きな力を持っていると感じて、歌の言葉について詳しく知りたいと思ったのです。どんな町へ行っても、その地方に関係する歌を話題にすれば、土地の人と親しく会話ができました。

一方で、広く人々に知られている歌は、その歌を愛する人が属す共同体や価値観、社会階層まで表すとわかりました。それで、最初の本は仕事と働く人々に関する歌の研究をテーマにしました。また、アフリカ系アメリカ人の歌はたくさんあるのに、研究書や歌集など印刷された資料が極端に少ないこともわかりました。黒人の歌の記録の少なさはショックでした。まず黒人民謡である初期ブルースの資料を探したのですが、研究できるほどの資料が集まりませんでした。他方、黒人霊歌の資料は19世紀のものからいくらかあり、歌詞にとっても感動したので、黒人霊歌から研究を始めて本を書きました。歌の研究では、社会で抑圧された人々や隠蔽された構造的問題を〈影〉として捉え、そこから聞こえる声を聞こうと努力しました。

歌の研究に並行して、伝承民話の研究も少しずつ行ってきました。特に興味を持ったのは、動物になってしまった人間、人狼の物語です。異形の者や境界性の生き物と、それを生み出した人々の想像力の源泉に何があるのかということが、私は知りたかったです。人狼を代表として社会から排斥される生き物たちは、人間や社会の影の部分を実体化しています。沈黙を強制された何か（影の部分）に声を与えて、表面化している物語の登場人物です。私の研究してきた歌とは、社会の影に隠されてしまった人々の魂、あるいは存在の〈声〉で、物語はその人々の魂が映した社会の影の〈姿〉であろうと思います。

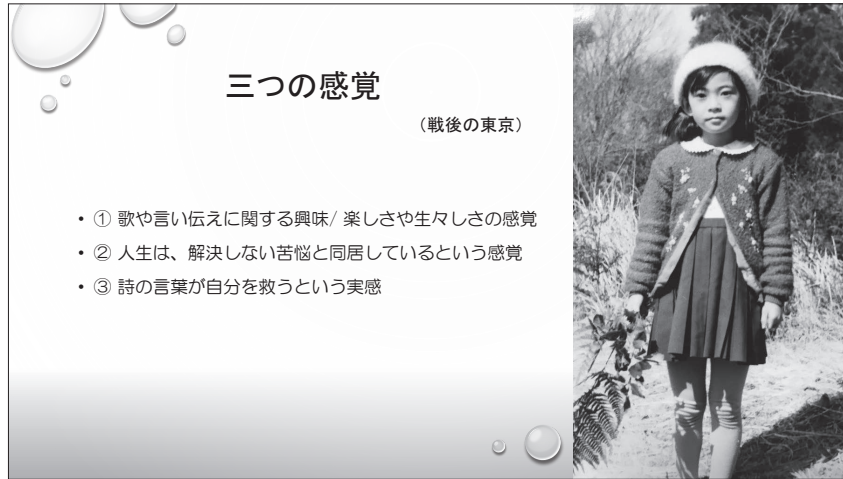
先を急ぎましょう。十年ほど前から私の研究方向に賛同してくださる方々が増えたので、ヴァナキュラー文化研究会を立ち上げて、〈権威や権力を持たない人々の表現〉について研究の幅を共同して広げ、理論化を試み始めました。また今は、愛の伝統について整理中で、現代まで連なるラブソングの系譜を研究しています。これは、エズラ・パウンドのロマンス詩研究に触れて以来深掘りせずに来た関心事でした。「愛とは何か」ということも、私の研究テーマであり続けています。同時に、ヨーロッパの民話を自分なりの読み方で解説して、本を書こうとしています。民話の本では、「幸福とは何か」を考察する予定です。ラブソングの系譜と民話の読解については、これから成果を発表することになるので、どうか楽しみにして下さい。

私がしてきた研究のリストを見ると、あちこち寄り道ばかりしたようにも思えますが、私の中ではそれなりに脈絡がありました。私は、人の心や世界の仕組みの、沈黙させられた部分、隠された部分にずっと興味がありました。《表現の世界に深く潜んでいる沈黙の中身》を、自分の言葉で説明したかった。それが私の一貫した姿勢であったように思います。詩や歌詞や物語は言葉による表現ですが、言い表された意味以上の違う世界を私に見せてくれるので、「言表されてない〈これ〉を私はわかりましたよ」と、誰かに説明したくて仕方がないのです。

3

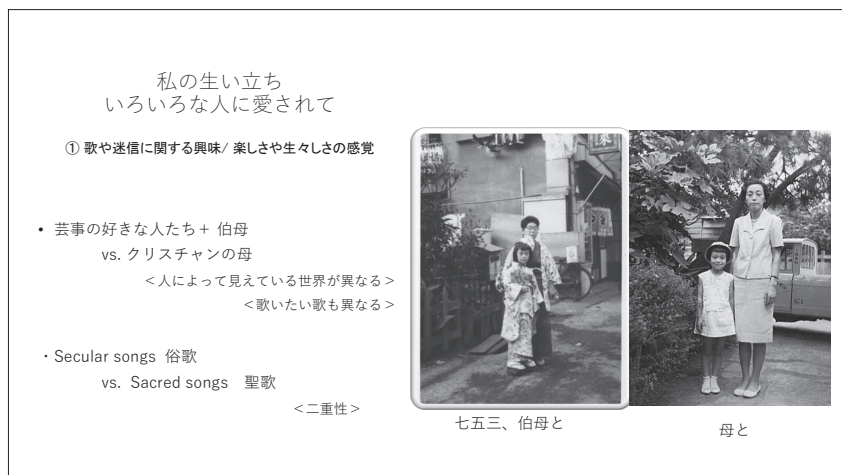
沈黙に聞き耳を立てたい気持ちの根底には、小さい頃から自覚していた周囲との違和感がありま

す。私は、他人が私に持つイメージと自分で思う私自身が一致していないと感じていました。普通は思春期にそういう気持ちになるのでしょうかけれど、私の場合は、物心ついた時からこの感覚があったように思います。自分が観察して理解したことで、周囲の大人たちの言動が微妙にずれている。大人が私について語ることは、何か違うと感じられる。しかし、その違和について語られることはない。理解や感覚と現実との亀裂の間に落ちた沈黙の意味を、私はずっと、「あれは何だったのだろう」と思考の中に温めてきて、大人になってからぼちぼち説明し始めた、という事かもしれません。そこで次は、私の育った環境についてお話ししてみます。



私は、東京の戸越公園という東急大井町線の駅近くで十歳まで過ごしました。ここでの経験が、私の核になっています。戦後の東京で自分の中に刻まれた感覚は、大別して三つあります。ひとつ目は、歌と言い伝えに関する興味です。歌や言い伝えは、生きていく楽しさや生々しさとつながっています。二つ目は、人生は解決しない苦悩と同居しているという感覚です。これが自分以外の人々への深い共感というかシンパシーというか、根源的な悲しみというか、そういう水脈へ私を誘うことになりました。そして三つ目が、言葉の力を知ったこと、詩の言葉が自分を救うという実感でした。この三つについて、順番に話してみます。

① 歌と伝承



私は両親と一緒に、父方の伯父と伯母が所有するアパートの二階に住んでいました。そのアパートには伯父と伯母と三人の年上の従兄弟も住んでいました。昭和30年代の事ですから、終戦から15,6年しか経っていません。人々は三畳や四畳半の小さな部屋で、充分楽しく暮らしていたと記憶しています。トイレは共同で、アパートの住人は家族のように過ごしていました。写真をご覧いただいて、左の写真の背景にあるのがそのアパートです。下はラーメン屋さんともうひとつ何かの店舗が入っていて、私の家族はラーメン屋の隣の店舗の二階の部屋を借りていました。二階には四世帯、子供を含めて合計12人が住んでいました。

伯父は新潟十日町の出身で、とても歌が上手でした。私はよく伯父とお風呂に入っていたのですが、伯父はお風呂で朗々と民謡を歌ってくれました。伯父の歌については、『アメリカを歌で知る』（祥伝社新書）のあとがきにも書きました。また、父方の祖母は祖父と結婚するまで芸者だったということで、お座敷遊びや三味線、唄いなどに長じていました。私の父の実の母親は父が12歳の時に結核で亡くなっているのです。この祖母は二番目のお母さんです。父が成人してから祖父と結婚しており、年齢は祖父よりずいぶん若かったはずですが、祖父は私の誕生前に他界し、祖母は茶道と華道を教えて生計を立てていました。ともかく、そのように芸達者な親戚が集まる時は、実ににぎやかでした。伯父が歌のリードをして、祖母や伯母が三味線を弾き、合いの手を入れ、私の父が酔っ払い踊りをするなど、まさに昭和の温泉町の宴会みたいな感じです。

伯父や祖母に加えて、私とその芸に憧れたのは、アパートの隣の一軒家に住む家族のおばあさんでした。おばあさんといっても、まだ五十代だったのではないかしら。日本舞踊のお師匠さんで、しかも男踊りの名手でした。黒紋付を着てキリッと舞う姿がカッコよくて、目を見張りました。他にも、商店街には毎週のようにちんどん屋さんが出ましたし、お祭りの時は山車と太鼓が、お正月には獅子舞が来ました。飴細工の屋台や焼芋屋さんの屋台でもおじさんたちは歌うように客を引き、縁日ではバナナの叩き売りがありました。そうした全てを楽しみながら、私は歌や踊りといった娯楽に興味を持ち、生活の中で聞こえる人の声と身体による表現が好きになりました。

こうした人々の中で、私に最も影響を与えたのは伯母と母でした。伯母は視力が弱く、細かいことに頓着しないサバサバした人でした。伯母の子供達、つまり私の従兄弟は三人とも男子だったので、伯母は私を一人娘のように可愛がってくれました。この伯母が、言い伝えを様々信じていた。真顔でいろいろなことを言うわけです。お葬式を出した家の前は親指を隠して通らなければ親の死に目に会えないとか、夜は爪を切ってはいけないとか、夜に新しい靴を下ろしてはいけないとか、どことかの交差点で交通事故があったのでお地蔵さんに供え物をしないと幽霊が出るとか、もう忘れてしまいましたけれど、あれやらこれやら忙しかった。

ここで少し話が飛びますが、1990年代でしたかブルーズの研究をしていた時、1920～30年代に録音している初期ブルーズメンの多くが視覚障害者か弱視者であると知りました。ブラインド・ウィリアム・ジョンソン、ブラインド・レモン・ジェファソン、ブラインド・ブレイク、ブラインド・ウィリアム・マクテルと、優れた歌手がみんな視覚の障害を負っている。ロバート・ジョンソンも弱視だったと言われています。これを知った時、伯母の迷信深さには、彼女の視力の弱さが少なからず関係していたのではないかと気づきました。初期ブルーズの歌詞は黒人の民謡に直結していて、アメリカのポピュラー音楽市場に影響される前の独自の世界観を表現しています。そこには彼らの信仰や伝承が組み込まれています。私の伯母も、晴眼者とはいくらか違う世界を見ていたので

はないだろうかと思います。幼い私にとって、伯母の話には特別なリアリティがありました。彼女が「実際に」見ていたからこそそのリアリティだったのでしょ。

一方で私の母は、結婚した後でクリスチャンの洗礼を受けた人で、伯母の信じていることは迷信で、全部嘘だと言いました。私は、母の言うことの方が正しいように思っていたのですが、理屈に合わないタブーやしきたりを心から信じ、その世界を生きている伯母が、なんだか好きでした。伯母は、ご先祖様の霊とか戦前から道端にある大きな石に宿る神様とかいった、あれこれの見えない力とバランスをとりながら暮らしていて、ややこしいけれど、孤独とは無縁に生きているようでした。一方私の母は、そうした雑多な力の束縛を嫌い排除した一方で、孤独でした。一心に聖書を読んで自分を支えようとする、母のかがみ込んだ姿や祈る声をよく覚えています。子供の目には、母の人生の方が苦しうに映りました。だからこそいっそう母はかけがえのない存在であり、母を見ていて、幸せとは何かを考えるようになったと思います。同時に、絵画をはじめとする芸術への母の興味や、自然をこよなく愛し花や鳥の名前をよく知っている人となりは、孤独になりがちな母の性格とも無縁ではなかったと感じています。

私は、伯母と母のどちらの生き方が良いかというふうには、考えなかったです。その代わり、^{よろず}萬の神様にしろ天国の神様にしろ、見えないものに一生懸命になる人間の心が、不思議なものとして私を捉えました。異なる世界に生きている伯母と母が、それぞれの価値観で私を愛し、育ててくれたわけです。昭和の木造アパートに住む少女が、異教徒とプロテスタントの二人の母親を持ち、その二人を往来しながら大きくなったというところでしょうか。多神教とキリスト教が混在するややこしさは、西洋文学を幾らかでも勉強した人なら想像できると思います。

ところで、先ほど、周囲の人の歌う民謡や端唄、小唄、長唄などが好きになったと申しましたが、一方で、私は讃美歌にも親しんでいました。毎週日曜日には、母に連れられて教会へ行っていたからです。教会は母の避難所でした。私の母は讃美歌や文部省唱歌は歌いましたが、流行歌を口ずさむのを聞いた覚えがありません。そうすると、父方の親戚は俗歌 secular songs の人々、母は聖歌 sacred songs の人だったということのようです。仕事歌や恋歌のような俗歌もスピリチュアルやゴスペルソングのような宗教歌も、私は同じ情熱で研究していて、それにはこうした背景があるからなのかもしれません。

私は、このように正反対な価値観が否応なく同居する環境で、文化の多様性が生む豊かさと厳しい軋轢を日々体験していたと言えます。ざわざわとして面白い幼年時代でした。

② 解決しない苦悩

- ② 人生は、解決しない苦悩と同居しているという感覚

桶屋のお婆さん + 人々

<語らぬ行為の背後に(苦痛の/影の)物語がある>

- ③ 詩の言葉が自分を救うという実感

詩を教えてくれた小林幸恵先生

<詩の言葉 (個人と距離を置く言語) は人を救う>

<言葉は共有された時に 普遍を取り込む>

町内に住んでいたある婦人について、印象的な悲しい思い出があります。先にお断りしておくと、これはとっても幼いときの私の記憶なので、私の中で物語化してしまって、事実とは大いに異なっている可能性があります。ただ、大事なのは、私にはこれが「事実」として残り、影響を与えたということです。その人は桶屋さんの奥さんで、私の記憶の中では、漫画に出てくる鬼婆みたいな外見でした。くちゃくちゃの着物を着ていて、灰色で薄くなった頭髮をごちゃごちゃにまとめてあって、体中しわだらけで手足が細い、そんな感じ。桶屋のお婆さんは、夕方になると時々、商店街の八百屋の向かいにある電信柱にしがみついて、泣き叫ぶんです。当時は、電信柱はまだ木でしたから、お婆さんはそれを引っ搔きむしったり唸ったり、大声で叫ぶように話しかけたりする。「桶屋の婆さん」と近所では呼ばれていて、特に子供たちは気味悪がっていました。

私は、少し大きくなった時、桶屋のお婆さんがどうしてそんなことをするのかを知りました。息子さんが戦死していたのです。息子さんは背が高かったらしい。一人息子を失った悲しみに狂ってしまったお婆さんは、高い電信柱を息子さんだと思ってしまうのだということでした。戦争が終わって16、7年経っていたのではないかしら。その長い間、お婆さんは時々同じ電柱にしがみついて泣いたり叫んだりしていたのだろうか。空が夕日で赤くなる頃、商店街が買い物の人でにぎやかになる頃、その発作は起こりました。桶屋のお婆さんの壮絶な悲しみの姿は、人生の不条理を私に教えました。どうにもならないことが人生には降り掛かり、対応しようとする自分自身さえどうすることもできない事態が起こり得る。ただ泣き叫ぶだけ、ただ狂うより他に生き延びる術がない人生を、ごく身近に感じました。

他にも色々な人が周囲にいました。睡眠薬を飲み過ぎた新潟出身のお姉ちゃん、夜逃げした隣人一家、タバコのヤニで歯が真っ黒なタバコ屋のお婆さん。戦後の東京で、私はそういう人たちに愛されながら、自分の全体が二つの大きな目となって、彼女や彼をじっと見つめて生きていました。そのうちに、人生は苦悩との伴走なのだという感覚を育てたと思います。自らの境遇について語らぬ人々の行為の背後にある〈何か〉が、その人々の〈物語〉なのだと分かったのは、私が大人になってからです。

③ 詩の言葉

私は、両親にも伯母の家族にも愛してもらって、幸せな子供時代を過ごしました。ですから、楽しい事だったたくさんあったのですが、振り返ると、人生の最初の十年間で人間の悲しみを見てしまっ、それが私の後の人生を決めたという気がしています。私の周囲にいた人たちの複雑なあれこれを子供の目線で観察していたことに加え、私自身も、できれば経験したくなかった痛みを経験せざるをえませんでした。それは、私の手の指が生まれつき短かったため、身体障害としてはとるにたらないものかもしれないけれども、まっさらな心に傷がつく事は、実にしばしばありました。その経験があって、他人の傷や悲しみに敏感になったかもしれせん。

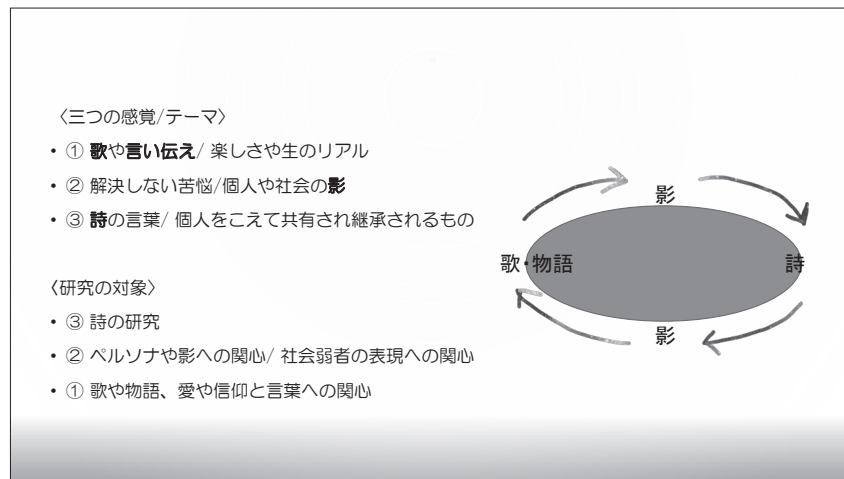
幼稚園も結構きつかったですが、小学生になると子供たちの差別意識はグッと大人の差別意識に近づくため、いじめも残酷になって、私は今でいう不登校のようになりました。学校に向かう道の途中で、急に吐き気がしてきて進めなくなります。踵きびすを返して帰宅し、家にいると元気なので自宅であらわしている。両親も心配しましたが、自分でも何が起こったかわからなくて、しばらくそんなふうにごろごろしていました。

同級生への恐怖と不可解な自分の症状から私を救ってくれたのは、その時の担任だった小林幸恵先生です。この先生が、詩を教えてくださいました。小林先生が担任だった1年1組では、書きたい生徒だけノートに詩を書いて出すことになっていました。上手な詩だと、クラスみんなに紹介してもらえます。私は毎日三つくらいの詩を書いて、出していました。先生は、ほぼ毎朝私の詩を教室で紹介し、褒めてくれました（ほぼ毎日、というのも、私の都合良い記憶による物語かもしれませんが）。文芸コンクールでも賞をもらって、どんどん詩が好きになりました。また、詩のノートは先生との交換日記のようでもあり、先生は詩への感想やアドバイスのほかにちょっとした語りかけも書いてくださるので、文字にした言葉を通して先生に自分の心や観察を知らせる喜びが、私を支えたのです。

そのうちに、自分の思考や感情のモヤモヤは、詩として言葉になると、個人的な体験からは独立した〈作品〉として歩き出すのがわかり、その不思議さにすっかり魅せられてしまいました。言葉は私だけのものではなく、共有された時に普遍を取り込むと感じました。もちろん、そんな表現で理解したわけではなかったですが、〈作品〉とは何か、ということは、わかり始めていたと思います。この辺りから、私の文学へのこだわりが生まれました。言葉は人を救うという確信、言葉を誠実に使うことへの、信仰にも似た気持ちを育て始めていました。それもあってでしょう、私は迷信深くはならなかったし、洗礼も受けませんでした。その代わりに、研究対象となった数多くの歌と物語が、私に多くのことを教えてくれています。

では、こうした経験は、一体どんなふうに私の研究に関係しているのか。次はそのことをお話しして、最後に今日の講演タイトルの秘密を明かしますね。

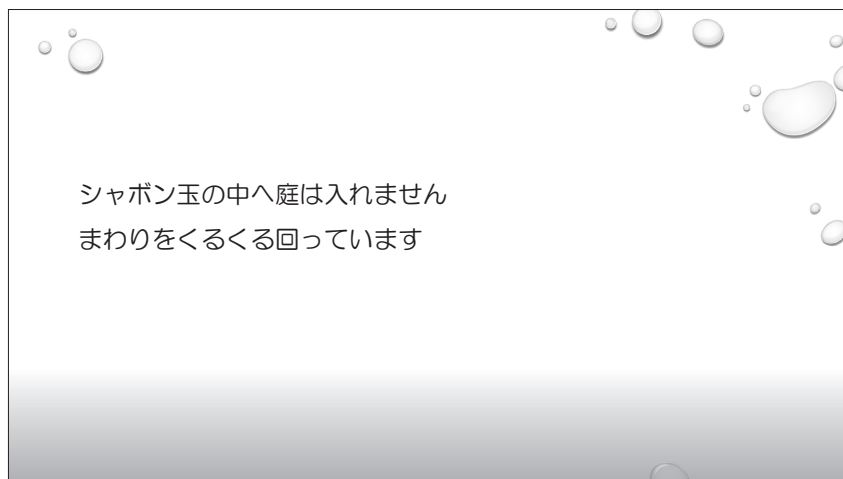
4



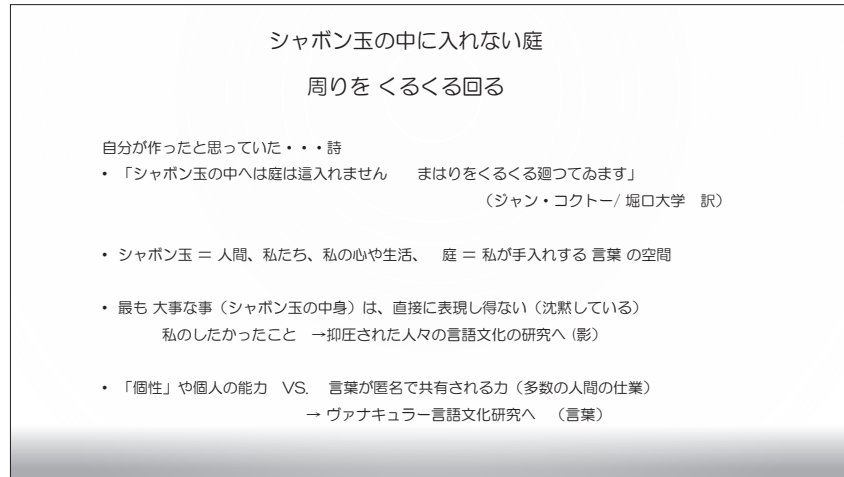
最初に述べました三つの感覚は、①歌や言い伝えに関する興味／楽しさや生々しさの感覚、②人生は、解決しない苦悩と同居しているという感覚、③ 詩の言葉が自分を救うという実感、でした。面白いことに、私は研究を通して、私が成長過程で順に身につけてきたこの三つの感覚を、逆順に確かめてきているのです。まず、③の詩。学生の時アメリカ詩の研究をして、それから人間の無

意識について強い興味を持ちました。次に、②の苦悩。人の思考の背後に沈黙している苦しみの部分への興味は、社会弱者すなわち社会構造の影の部分に生きる人々の表現の関心へとつながりました。そして①の芸能と宗教。子供時代の早い段階で感じとった歌や物語の楽しさや奥深さ、歌や物語が孕む真実性への信頼は、歌や物語がテーマとする愛や信仰という問題に対する考察に深まっていきました。そしてこれが、自分にとって最後の根本的な研究課題だろうと思っています。私は、人生の出発点にあったものを、人生の終わり近くで一生懸命掘り返しているんですね。

苦悩と喜びを行き来しながら人は生きていて、その過程で何かや誰かを愛し、信仰やそれに代わる何らかの心の支えを求めるのだけれども、愛も信仰も言語化されると個人とは少し距離を置くので、その距離感に人は救われるのだと思います。そうして言語化されたものが歌であり、物語である。中でも私が特に注目したのは、優れた歌や物語は多数の人々に匿名で共有され継承されるということです。誰の言葉だったかわからなくなるほどに、まるで初めから自分の言葉であったかのように、あるいはすっかり馴染んだ自分の言葉として、人々は歌や物語を記憶に取り込み、その言葉が作り出す世界を生きていく、ということでした。母にとっての聖書の言葉はそれであったし、伯母にとって言い伝えが教える世界の仕組みがそれでした。

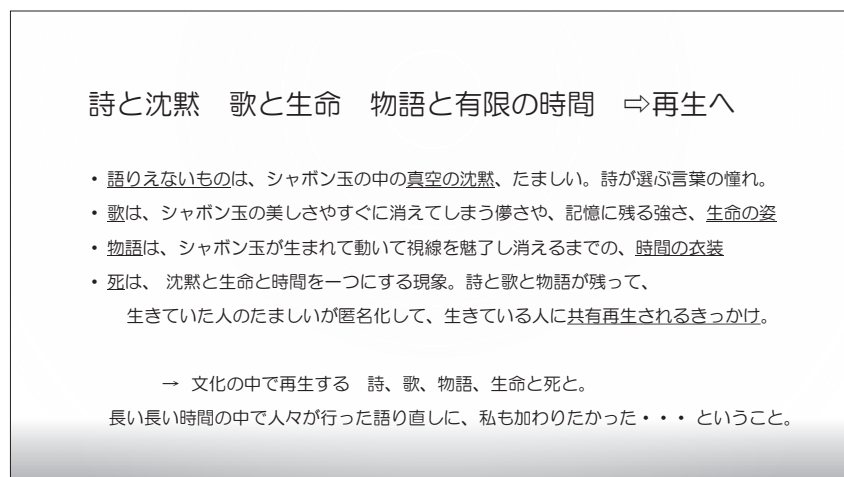


では最後に、今日の講演のタイトルについてお話ししましょう。「シャボン玉の中へ庭は入れません まわりをくるくる回っています」。これは、自分が小学校の時に作った詩だ、と私は信じていました。小学1年生の時からずっと私は詩を書いてきたけれど、その中でこれが一番好きで一番いい詩だと思っていました。ところが、大学生になってから、堀口大学の訳詩集『月下の一群』の中に、この詩を見つけてしまったのです。その時のショックはよく覚えています。自分の作品ではなかったという落胆はもちろんありました。一方で、この作品の価値を記憶にも残らない子供の頃に見抜いて、自分のものと思い込むほど反復していた私って、なかなかじゃん、という自分を褒めたい気持ちが湧いてきました。私は、よほど楽観的な性格なのでしょうね。でも、この発見で気づいたのは、私のような凡人が自分の言葉だと思い込んでしまうほど身近で、感動を誘う作品が私は好きだし、素晴らしいと思う、という点です。それが歌や民話の研究につながっていきます。



「シャボン玉の中へは庭は這入れません まはりをくるくる廻つてゐます」。ジャン・コクトーのこの詩を、幼いときには、ただ美しく、容易に気づかない真実を表現しているだけのように思っていました。今の私には別の意味も示しています。シャボン玉が、いずれ死んでゆく私たち人間の心や生活を表しているとする、そこに映った幻の庭は、研究して言葉を紡いでいる私が手入れをする、言葉の空間に喩えられる思うのです。私は、人間や人間の心のことを原稿に書いてきたけれども、言語という媒体を介する限り、本当に大事なことは直接表現することができない。ただ、事の核心の周縁をくるくると回りながら、いろいろに書いてみて、皆さんに読んでもらっている。私の研究とか著作とかいったものは、シャボン玉に映った庭みたいなものだ、と思うのです。実態はないけど、でも、私はわずかな能力と人生の主要な時間をその幻に費やしてきて、まあ、それはいつか風に吹かれてパチンと消えればいいんだろう。だけれども、ふと誰かが「美しい」と感じてくれたら嬉しいなあ、と思うのです。

5



それで、今、思うことは次のようなものです。〈語りえないもの〉は、シャボン玉の中の真空の沈黙、魂であり、詩が選ぶ言葉は、語りえないものに近づきたい一心で紡がれる言葉。〈歌〉は、

シャボン玉の美しさやすぐに消えてしまう儂さと、記憶に残る強さ、生命の姿を表してくれます。〈物語〉は、シャボン玉が生まれて宙を動いて、私たちの視線を魅了し消えるまでの時間、その時間がまとう衣装です。〈死〉は、沈黙と生命と時間を一つにする現象。生きるものが死んだ後には、詩と歌と物語が残って、生きていた人の魂が匿名化する。だから、死は、詩と歌と物語とがまだ生きている人々に共有され再生されるきっかけです。

このように、詩、歌、物語、生命と死とは、文化の中で再生を繰り返します。長い長い時間の中で人々が行った繰り返しの行為、語り直しの営みに、研究者として私も加わりたかったのだ… と思います。その気持ちに支えられてこれまでやってきて、これからもやっていくのだと感じています。

本日は、ご清聴をありがとうございました。